

No.792

栄光

『わたしが隣人になろう』

エゼキエル書16章5節〜6節
ルカによる福音書10章25節〜37節

東京神学大学大学院2年 片岡賢蔵

説教・「わたしが隣人になろう」 片岡賢蔵神学生…1
特集・このコロナ禍で考えたこと…2
礼拝委員会だより…5
図書委員会だより…5
説教・「天使も願う救い」 岸俊彦牧師…6
伝道師の書き込み…7
牧師の書斎から…7
長老のファイル…8

イエス様のたとえ話は、こう始

められます。「ある人がエルサレムからエリコへ下って行く途中」とある場所ではないのです。エルサレム、特別な礼拝をする場所。そこからエリコへ下る道と言えは礼拝を捧げた後の道です。イエス様は、わざわざ場所を特定されました。私たちが礼拝を捧げて生活の場を送り出される道で起こることとして。

たとえ話の中に入りましょう。ある人が追い剥ぎに襲われ半殺しに。すると人がやってくる。「祭司だ。神殿の礼拝を司る立派な人だ。祭司なら助けてくれるだろう」。そう、目で追いかけるが、わざわざ通りの反対側に渡って去っていく。次にやってきたレビ人も同じ。通りの反対側に渡って去

った。「私は、このまま死を待つ

しかないのか」ところが、3人目の人がやって来た。でも、よく見るとサマリア人。「彼らとは日頃から仲が悪い。望みは絶たれた。なぜ私は誰からも見捨てられなければいけないのか」。

さて、通り過ぎた祭司にも言いがかりがありました。当時、神殿の祭司には掟がありました。死体に触れてはいけない。助けようとして、この人が死んだら自分の仕事ができなくなるのです。もう1人、レビ人。彼にとつてエルサレムでの仕事はハレの舞台。死体に触れてケガレたら、せつかくの名誉に傷がつきます。彼らは生活を理由に目の前の人を見捨てたのです。しかし、本来、神が望まれていることは何であつたでしょうか。

このイエス様の話を、直接聞くのは法律学者でした。法律学者は神の掟を学び、それを生きようとする。神が望む正しい答えを言うことができずしました。「あなたの神である主を愛しなさい」。「また隣人を自分のように愛しなさい」ところが、問答は終わらない。たとえ話を聞かせ、イエス様は迫ります。「行つて、あなたも同じようにしなさい」。厳しい言葉です。できないとは言わせない。それでも、この主の言葉は、ある意味、救いの言葉にも見えてきます。「行きなさい。あなたは、もう罪を犯さないように」。そんな言葉に似ています。主は言われるのです。「あなたは本当に御言葉を生きなさい」と。

では、サマリア人は、なぜ祭司やレビ人と違ったのか。他でもありません。この物語を語るイエス様が、そうさせたのです。主は憐れに思ったのです。この人を助けたら面倒なことが起こる。そんな計算をしません。なんとも腹の内がズキズキと痛む。そのことに身をまかせた。この物語を語るのは主イエスその人なのです。そこ

で私たちキリスト者は、思い起こしましょう。実は、この理不尽な暴力をイエス自身が味わったことを。イエスは神でありながら人となられた。このイエスを人間は十字架につけて殺した。着ていた服を剥ぎ取られ、弟子たちすら立ち去った。誰からも見捨てられた。半殺しの人と同じことを味わって死んだ。だからイエス様は知っています。人間として生きることが、どんなに痛ましいことか。知っている、人間になったから。「腹の内が疼くほどに見捨てられたあなたが、あなたの隣人になろう」。

私たちは礼拝を捧げ、生活の場に遣わされます。それはエルサレムからエリコへ下る道と同じ。この道はまだまだ危険でいっぱいです。しかし、恐れないでください。私たちは主に愛され、主を愛する信仰を与えられました。それは誰にも邪魔されない。私たちは世に先駆けて主に見出され、礼拝を捧げる者です。今は憐みから動くときです。さあ、悲惨な世にキリスト者の声を響かせましょう。「わたしがあなたの隣人になろう」。

このコロナ禍で考えたこと

仕事がりモートワークになり、授業もオンラインで、会議もパソコンを介して、ということがもはや日常になった、という人もいるのでは。

するとやっぱり何か足りない…。それでも、「こんな発見があったよ」「見直してみたよ」「変えてみたよ」など、前向きに考えたこともあったと思います。

何年後か、何十年後にこの『栄光』を見つけた時「そうかあ、あの時は…」とって共に困難を乗り越えたことを喜び合いたいですね。



コロナ禍で考えたこと

小池 香

2020年4月、緊急事態宣言が発動されました。そしてその時、我が家の子どもたち4人は卒業という節目を迎えておりました。すでに転居が決まっていた長男は、

入社式もまま自宅待機の一人暮らしを始めることになりました。同じく、長女も自宅でのリモート研修から始まり、その解除と共に辞令がおりて引越越し、一人暮らしが始まりました。そして、高校を卒業する次女と小学校を卒業する三男も流されるまま、次のステージに立たされました。

不安材料は沢山あったものの、実際にはそれらの不安にストレスをあまり感じずに済んだように思います。それは、家族と過ごすドタバタな時間が解消してくれたのだと思います。今までにない長い時間の共有は、時には摩擦を生んだり言葉の使い方からの誤解があったり、ゴタゴタする場面も

多々ありました。いえ、沢山ありました。今まで言わずに済んできたことや、言わなくてはいけないのに言えなかったことが露呈したから大変です。それでも、家族という安心感は何物にも代えられないものでした。三度の食事作りや片付けは大変ではありましたが、子どもたちが幼かった頃に戻ったようで、私には甘美な時間でさえありました。

そんな中で感じたことは、この数年、人間関係が過剰に密になっていたのではないかということでした。複数のコミュニケーションの情報交換や意思疎通はスマホを使うことで、手軽で便利ではあるものの、不必要なことも多く、個人的な情報までも共有する場面もあり、相当な時間を割きます。家族とのコミュニケーションよりも時間を使うことになっていました。ここにも、ソーシャルディスタンスが必要であると感じました。

この「コロナ禍で考えたこと」

多田佳子

「天国の外交官」恵心流キリスト教の小西芳之助牧師など、たくさんのお会いがあり、経堂北教会創立50周年の時に受洗して、今日に至っています。

今、変化のある生活様式を受け入れて、いかに過ごすのかを求めていく必要があります。新型コロナウイルスに負けず、当たり前前の日常生活が平穩に送れますように祈る日々です。

やりたいことを吟味して、心と時間のゆとりのスペースを大切に、免疫力を維持しながら、楽しく、喜び、感謝のある生き方が出来たらと思います。

太平洋戦争中の2月に誕生した私は、幼少時身体が弱く、小学校入学も1年遅れのスタートでした。戦後、周囲は畑や牧場もあり、樹木、広い庭に池など自然豊かな田園風景の環境で、のんびり過ごしてきました。

常に知人や徒兄らと共に暮らした体験から、結婚後も両親や姪、将棋の弟子とも同居した昭和から平成初期でした。

自由で個性的な校風の学生時代。あこがれの丸の内勤めも。

青春期に将棋に夢中になり、女性が将棋を指すのはめずらしく、親善試合などでモテモテ。

その将棋が縁で結婚し、家庭に入り、安定した生活と子宝に恵まれ、応援してくれる夫の存在が大ききく、将棋の大会などで優勝した実績から、女流棋士のアマチュアからプロとしてスタートしました。将棋のイベント、講師など普及活動もしてきました。が引退して、きっぱり離れています。

将棋以外に、地域の住民運動、北沢法人会の役員。スポーツクラブ、旅行、登山などを楽しみ、詩吟も、自由に好きなことをして――。

それぞれの出会いと別れを持ち、平成から令和へと時は流れて、老いと体力の衰えを真に感じて――。

今なお、一期一会を大切に。日々新たに、自由が与えられ、生かされていきます幸に感謝です。

恵み

原 知子

新型コロナウイルスがまだ対岸の火事であった1月、年明けに異動となった私の歓迎会は中止となった。勤め先の銀行が早々に飲み会自粛を指示したからである。2月、世間よりも早く、毎日の検温、マスク着用、手指の消毒の徹底が始まり、会社が毎日マスクを支給するようになった。3月、会社の方針で旅行も外食も自粛となり、出勤者を減らす議論が始まった。

そして、緊急事態宣言により世間が在宅勤務や自宅待機に追い込まれる状況となった4月。会社も同様の方針となったが、私の担当は外国為替資金決済。お金の動きは止められない上に、責任者ともなると出勤必須。ガラガラの下鉄に揺られて出勤する日々が続いた。さすがに6月からは週1回の在宅勤務になったが、在宅で出来る仕事を増やすのに苦心した。会社の年間業務計画は7月によろしく

確定し、計画をこなすため慌ただしい夏を過ごした。

仕事優先となると、私事は静かにせざるを得ない。4月以降外食は数える程しかせず、大好きな旅行も控えている。趣味のヨガはオンラインクラスとなり、対面での買い物が好きなのにネットで買うようになった。友人とは長らく会えていないし、祝いの席は全て延期となった。

ただ、不思議と怖くは無かった。数々の対策が必要で、対策しても罹患する可能性はあるのだが、職業柄この局面を乗り越えなければならぬという緊張感が勝った。そして何より、キリスト者である、ということが大きかった。身内とも距離を取るなど、制限の多い生活だが、主を見上げて歩む、ということは変わらない。リアルで、またはありがたいことにネットで、礼拝を守ることができる。主の言葉に耳を傾ける時間はこの状況を忘れさせてくれる。また、会えなくても兄弟姉妹のことを覚えて祈り、愛することができる。この恵みの内にあることが、とても私を強くしたのだと思う。

再開した学校生活の中で

松井光子

昨年度末に勤務先が休校となり、数々の行事が延期や中止を余儀なくされた。クラブの公演や試合は中止、担任している中3の修学旅行も延期の末、中止となるなど、多くの「あきらめ」があった。

変えることができるものを変え、変えることのできないものを受け入れる冷静さ、変えることのできるものできないものとの識別する知恵を神に祈る「ニーバーの祈り」を思いつつ、私たちが今あきらめてはいけないことは何か、考えさせられた。

6月初旬から分散登校が始まり、下旬からは通常授業が再開した。以下は生徒が記したクラス日誌からの抜粋。――「久しぶりの授業はだいぶ疲れるけれど、楽しい」。休校中に幅を広げた趣味と、やるべき事と、睡眠時間のバランス調整に苦心している。「体育の授業は念入りなストレッチから。

休校中に衰えた体に沁みる」。今日5ヶ月振りの部活。久々の練習着で足がスースー。準備・片付けなど以前は何も考えずにできていたことも『あれ?』となることも多くある。ボール感覚はどこかに飛んでいつてしまった。でもボールに触れることがすごく楽しい。原点に戻れたような気がする。」「コロナ関連のニュースが多く私もそればかり気にしていたが、この間も環境問題は悪化し続けている。一つのことばかりを見るのではなく、様々なことに目を向けたい。

気づく力と行動力があれば、社会を少しでも良い方向に変えていくことができると思うので、まずは周りにどんな問題があるか気づけるようにポーツとしないで周りを見ようと思う。「今朝の礼拝で創世記を読み、前例のないこの状況の中で、天地を創造された神様に生かされていることを改めて思った。自分が生かされている意味を見つけられる生き方がしたい」。互いに刺激し合い、成長していく生徒たちから多くのことを教えられる日々。一日一日を丁寧にごしたいと思う。

コロナ禍で考えたこと

森 昭子

ここ厚木では8月以降感染者が増加し、後期高齢者で持病ありの私たち夫婦は、今も外出自粛生活を続けている。夫は自宅を事務所、まだ少し仕事をしているが、研修はオンライン、手続きは郵送となり、会合も中止、趣味の合唱もお休み。私のボランティアも食事作りで密になるので、休止状態。二人ですっと狭い家で過ごすことになる。ストレスがたまる。これが老後の生活なのだろうか? そうだとしたら、もう少し楽しい気分でごせるようにしたい。夫婦の在り方、生活の仕方を変えなければと思った。夫にもう少し家事を負担してもらおう。断捨離をして家を整理し、これから先の人生をすっきり過ごしたいと思う。この時を益としよう。

気持ちの上でも、体力維持の上でも、散歩の時間が一層大切になった。外に出る。風が、木々の緑

が心地よい。生き返った気がする。自然は神の息吹を感じさせてくれる。主を仰ぎ、祈ることができる。幸いと思う。喜んでいよう。

こんなこともあった。幼友達から、庭になったスモモで、在宅期間に作ったというジャムが届く。Pomina gardenの名入りのラベル付き。友と姉と私の頭文字をとって名付けた庭の片隅に作った小さな花壇の名前だ。よく覚えていてくださったものだ。三人で夢中で遊んだ思い出が蘇る。また短大時代の友人からは写真の整理をしたからと、若かりし頃の二人の写真が送られてきた。長い交流に涙が出る。彼女の行動力にいつも触発されてきた。礼拝にも出席できないが、ライブ配信で与り、問安の便りや、かつて一緒にルデヤ会委員をした方々から、寄せ書きのカードも届く。祈りを合わせる。繋がっていると感じる。数々のメールにも励まされ、慰められた。嬉しく感謝だ。ご交誼に支えられていること再認識する。

これから晩年へ、皆の中で、終活も進めつつ、導きと祝福を祈って、喜んで感謝して歩もう。

礼拝委員会だより



今年の1月末頃、中国で新しい感染症が流行しているとニュースで知った時は、日本は島国なのでウイルスが入り込む場所にはつきりしている、だから水際で止めることが出来る、と思っていました。もし日本にウイルスが入り込んで数ヶ月の流行で収まり、その後は今まで通りの日常生活が戻ってくると思っていました。

しかし、あれよあれよという間に感染は拡大し、ウイルスはいつの間にか日本に入り込んでいました。そして、ついには緊急事態宣言が出され、外食、外出、集会の自粛が要請されました。私もアルバイト先より、4人以上集まる集会には出席しないようにと指示がありました。礼拝への出席を止められたようで心は平静ではありませんでした。でも、もし私が感染し、家族や職場に掛ける迷惑を考えると、自宅で礼拝を守るべきだと考えました。

その後、緊急事態宣言は感染が少し収まったのと、経済の落ち込

みを考慮して解除されましたが、感染者の数は一進一退です。年末まであと2ヶ月となった今でも感染者数は減りません。以前のような生活を取り戻すことはできませんが、感染拡大を抑えて共に生活する方法が判ってきました。①人と人の距離を保つ、②人の密集を作らない、③閉ざされた空間の換気を心掛ける、④手洗い・消毒で清潔を保つ、です。

礼拝を毎週行えますように。人々が礼拝に集うことが出来ますように。そのために礼拝に集う者が守るべきことは、①体調の悪い時は無理をせず自宅で静養する、②マスクを着けて出席する、③教会に入ったらず手を消毒する、④人との距離を空けて座る、⑤密集しない、⑥建物内は時々窓を開けて換気を行う、⑦水分補給の飲み物は各自が持参する、⑧教会内での飲食は避ける、以上です。

教会に集う皆様は今まで実によく協力してくださいました。ありがとうございました。愛する人を守るため、自分自身を守るために今まで通り今後も注意して過ごしてまいります。 (鈴木こづえ)

図書委員会だより



今年度に入り初めての委員会を9月20日に行いました。総勢5名の小さな委員会です。でも経堂北教会の歴史のうちに積み上げられた貴重な書物あふれる書庫を教会の宝として守る！、そして教会員の皆様にこの蔵書の恵みを伝え、分かち合えるようにすると、その使命は大きいと自負する委員会なのです。コロナ禍で5ヶ月ぶりに、このいただいた使命を今年度どのように果たしたらとこの日、話し合いました。

まず毎年のメイン活動でもある分かち合いとしての茶話会をどうするか？ 老いも若きも本という誰もが幼い日より出合いを持つ話題なので、気軽なおしゃべり会として続いてきました。教会員同士の交わりとして貴重だという意見が多く出され、毎年2回のところ今年度は1回実施することで委員皆一致しました。コロナウイルス感染予防を考えるのなら、人が集まる事は避けようと茶話会中止の決断が妥当ですが、「交わりのない

危機感も大きいのでは？」と、コロナという見えない禍に臆せず何とか出来ないかと考えたのです。

密集、密接、密閉に注意して…安心して集まれる会場は？ 教会で一番広い所は？ と考え、礼拝後すぐ集まれる礼拝堂案が出されました。そして、茶話会の講師には岸先生案が出され(昨年度のアンケートでも希望が出ていた)この特別な思いで行う会にお願いすることとしました。ただ大変お忙しくされている先生だけに難しいのではと皆思いつつ…さでどうなりますか？ 委員会後、即ご相談したところ、会場は1階、講師の件はまだ先なので一考してくださることになり、実現の方向へ1歩進み、2月の3週目を予定としました。コロナウイルスから守られて良き交わりの時となると信じ祈りつつ準備してまいりますので、皆様お楽しみに！

また外出が難しいこの時、教会員の皆様に教会図書にふれていただく好機と、読みたくなるように本の並び替えなども考えています。「こんな本を入れて！」等の声もお待ちしております。(千葉一恵)

説教

『天使も願う救い』

イザヤ書52章7節～10節

ペトロの手紙一1章3節～12節

岸 俊彦

「われわれ信仰者の生活も、信仰と望みと愛というものによって生かされるといえることが言えるので、これは、キリストに対することで、キリストから出ていることである」(竹森満佐一『講解説教ペテロの第一の手紙』)。

信・望・愛(1コリント13章)

によってキリストと一つにされた私たちの救いについて、預言者たちは探求し、注意深く調べました。預言者たちには、「自分たちの内におられるキリストの霊が」働きかけました(1ペトロ1:11)。天地創造の前から神の豊かな憐れみが目撃され、今やキリストにおいて私たちに注がれています。私たちはキリストの霊の働きにより、神の力を注がれて、新しい命を生きています。

キリストを私たちは見たことがあります。しかし、キリストを愛しています。終わりの日に再び

来てくださるキリストをまだ見ることはできません。しかし、キリストを信じています。私たちの信仰の究極の目標は、主イエス・キリストを信じることです。主イエス・キリストを愛することです。

主イエス・キリストを望み、希望することです。これこそ、私たちの信仰の実りとしての「魂の救い」(1:9)を受けけることです。

「魂の救い」とは人を肉と魂に分けての救いではありません。私たち一人一人の丸ごとの救いです。命の救いです。この救いは、キリストの苦難と栄光によって私たちに明らかにされました。計り知れない神の憐れみと恵みが、世界の片隅に生きる私たちに、信仰の小さい者に注がれています。

預言者たちは、王国の滅亡、バビロン捕囚という苦難の時代を生きました。終わりの見えない苦難の時代だからこそ熱心に尋ね、つ

ぶさに調べました。沈黙を守ってなかなか語りだしてくださらない神の言葉を待ちました。そして、ついに「目覚めよ、目覚めよ」(イザヤ51:17)との神の御声を聞きました。同時に「慰めよ、慰めよ、わが民を」(40:1)と新しい使命が与えられたのです。

先が見通せない苦難の中にある神の民に、神自らが語りかけ、促し、立ち上がらせてください。「見よ、ここに在る」と神が共にいてくださることを、神ご自身が預言者を通して語ってください。「見よ、主なる神。彼は力を帯びて来られる」(40:9、10)との預言が実現します。「いかに美しいことか。山々を行き巡り、良い知らせを伝える者の足は」と預言者は語りました(52:7、ロマ10:15～17)。

良い知らせ、福音こそ、私たちの救い主イエス・キリストです。私たちは、預言者たちが見たいと望んだ救いを見ることができるようです。「目覚めよ、目覚めよ」と預言者が語ったことは、私たちにとつてはキリストの救いに目覚めることです。キリストの霊によつ

て、キリストの苦難とその栄光に目覚めることです。このキリストにこそ、私たちの救いがかかっています。キリストを信じてこそ、私たちは目覚めて、奮い立たされて、主の力をまもって、キリストを着て、困難と嘆きの中から立ち上がることができます。

このキリストの救いは、天使たちも見たいと願っていた救いです。教会はキリストの救い＝福音を伝え続けてきました。「実に、信仰は聞くことにより、しかも、キリストの言葉を聞くことによつて始まるのです」(ロマ10:17)。キリストの福音が語られるところ、キリストの霊が働いてくださいます。

預言者たちが探し求め、天使たちが見たいと願ったキリストの救いに、何の幸いか、いや、神の恵みによって私たちはすでに与っています。私たちは、すでに主のものとしていただいています。このことを心から感謝し、喜びましょう。主をほめたたえ、聖霊に導かれて、ますます主を信じましょう。主を愛しましょう。主を待ち望みましょう。

伝道師の書き込み

今年はいつともより時間の進みが早いように感じます。というよりも、今年のことを振り返ろうとしても、とっかかりになるような記憶がないと言った方が正しい気がします。生活の方では変化が小さくて止まったようであるのに、時間はいつもどおりきちんと進んでいる。ただならぬ雰囲気の中で過ごしていた3月、4月ごろは時間の進みがいぶん長く感じたも

のでしたが、変化した生活に慣れきってしまったこの頃は、去年よりも何倍も早く時間が過ぎていくように感じます。

そう感じるのもう一つ、先月の神学校日があったからかもしれませぬ。礼拝のみとはなりませんが、片岡賢蔵神学生を招き、無事行うことが出来ました。実は私、片岡神学生とは同じ年に入学しています。(私にとつては2度目の入学式でしたが。)もつとも、同じ学び舎に居たのは2年間だけ、それも学年が違って授業などで顔

を合わせることもないので、お互いに久しぶりに見る顔といった程度でしょうけれども。入学から卒業まで、私は神学校生活というものは実に長いものだったと感じましたから、「神学校ってそんなにすぐに卒業するものだったのかしら？」と驚いてしまいました。そもそも私の場合は卒業まで片岡神学生より二倍の8年間かけていますし、卒業時点の私にとつては人生のほぼ3分の1が神学生でしたから、感覚が合わないのは当然と言えは当然なのですが。

時間は早く進んでいるような気がしていますが、実際には時間の余裕が増えています。もつとも、時間の使い方が下手くそで、あまり余裕を持って過ごせては居ないのですけれども……。余裕があるときはほんやりと勉強をしてみたり、気を逸らして別のことをしたりしています。時間はしつかり進むので、教団の正教師試験ももうあと1年を切ってしまいました。変な心配をかけぬよう、せっかく頂いた余裕をきちんと切り取って使いたいものです。(狩野進之佑)

牧師の書斎から



例年10月はバザーと召天者記念礼拝の準備でてんでこ舞いでした。今年はコロナ禍でバザーは中止、加えて10月末に2泊3日で行われるはずの教団総会も中止となりました。実に静かな10月でした。バザー収益は従来、対外援助に充てられていましたが、今年はそのための指定献金をお願いしました。昨年のバザー献金の倍額が献げられています。嬉しいことです。

いずれの教会、団体も財政的には厳しいことでしょう。少しでも助けになればと思います。

召天者記念礼拝は午前、午後と2度行うことにしました。初めてのことなので、どう分けたものかと思索しました。例年20の遺族(会員を含む)に案内しています。今年はこの内、この5年返信のない遺族への案内は行いませんでした。そして例年出席される遺族を午前と午後に分けて案内し、残りの遺族をまた半分に分けて案内しました。結局午前、午後とも92遺

族に案内しました。

締切日までに返信があったのは全体の4分の3でした。出席の返信は午前が57人、午後が60人でした。昨年出席の返信は182人でしたから昨年比64%です。

召天者遺族以外の会員のこのところの出席者は40人です。これも50音順で午前、午後に分けて出席をお願いします。会員以外出席者は最大でも20人にはならないでしよう。午前、午後どちらに出席してもかまいません。

礼拝堂は地階からギャラリーま

で使って、100人は距離をとつて座ることが出来ます。この『栄光』を手にかけている当日、実際はどうなっているのでしょうか!?

出席出来ないのと献金を送ってくださった方、近況をお知らせくださった方もいます。幸い、今回は宛先不明で戻ってきた案内はありませんでした。しかし、亡くなったので今後の連絡は不要とか、病気のため欠席との返信もありました。母召天後20年、母の年齢を越え、久しぶりに出席しますとの返信もありました。(岸俊彦)

個人消息



掲示板



- 合同礼拝・幼児祝福式
11月8日(日)午前10:15
説教 狩野進之佑伝道師
- 創立83周年記念礼拝
11月15日(日)午前10:15
説教 岸俊彦牧師
- アドベント 11月29日(日)
- 聖餐礼拝 12月13日(日)午前10:15
洗礼式
- クリスマス礼拝 12月20日(日)
詳細は改めてお知らせします。
- クリスマス・イブ礼拝 12月24日(木)
詳細は改めてお知らせします。
- 歳晚礼拝 12月27日(日)午前10:15

編集後記



▽『栄光』を通して教会員の方の近況報告がうかがえたのはとても嬉しいことでした。(沢田)

「栄光」2020年11月号
日本基督教団 経堂北教会
〒156-0051 東京都世田谷区宮坂3-21-11
電話：03-3428-5029 / FAX：03-3428-5038
牧師：岸 俊彦 伝道師：狩野進之佑
編集：栄光編集委員会
Email：kyodon@nifty.com
HP：http://kyodokita.life.coocan.jp

長老のファイル

10月の長老会は、神学校日の礼拝に説教を担当された片岡賢蔵神学生も陪席され、行われました。近況をお聞きし、各長老から感想が出され、和やかな協議のひとつでした。

第2四半期を終えての会計報告では、まず出席者数の推移が報告されました。2020年度に入つての礼拝出席は平均64人、前年比56%、ライブ配信が平均30件。会

計は献金がほぼ予算に近く献げられていること、支出が抑えられているので賄えていること、などが報告されました。

新型コロナウイルス対応については、配餐のやり方をなお工夫すること、献金籠のまわし方などの確認をし、召天者記念礼拝は、現在決まっていること、各担当者、更に検討することなどを確認しました。クリスマス礼拝、イブ礼拝についても2回に分けて行う方向で検討を進めます。

販売のみ行うことになりました。例年お献げしているところに今年もお送りできるように、製作品の購入、バザー献金へのご協力をよろしくお願いいたします。

クリスマス礼拝後の愛餐会・祝会は中止と決まりました。CSではパウロの伝道旅行とパウロの名言集の動画を計画すること。これは2003年に上演された演目。そんなことからDVDを久しぶりに見ました。賜物を生かした兄弟の活躍で毎年工夫した物語が繰り返られていました。先生、

子どもたち、懐かしい伝道師の方々も登場していました。ミュージカルに参加した子どもたちの心にクリスマスの喜びはどのような残っているでしょうか。

コロナ禍で孤独、不安、困難の中にある方々の上に、聖霊が豊かに働いて、励ましとお支えがありますように。(照内真知子)